

キャラクター名
三善 梅子

プレイヤー名

シンドローム	ブラム=ストーカー ウロボロス	ワークス	検怪達使D	カヴァー	貴人の守り人
オプション		年齢	10代	性別	女
覚醒	無知	衝動	加虐	初期侵食率	39%
出自	陰陽師の家系	経験	平凡への憧れ	邂逅	借り

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	35
肉体	2		0	4		6	行動値	9
感覚	3		0			3	(非装備時)	9
精神	3		0			3	戦闘移動	14
社会	0	1	0			1	全力移動	28

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	4		射撃			RC			交渉	1	
回避			知覚			意志	1		調達	2	
運転:			芸術:			知識:			情報: 検怪達使	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
赫き剣	白兵	6r+4	5	23+1~10		
赫き剣(100%)	白兵	6r+4	5	26+1~12		
文殊変生Ⅰ	白兵	6r+4		43+1~10		装甲無視。HP20点回復。c値7。侵蝕率9
文殊変生Ⅱ	白兵	14r+4		50+1~12		装甲無視。HP24点回復。c値7。侵蝕率13

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
思い出の一品	
応急手当キット	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
半妖	P	N		
母	P 親近感	N 恐怖		
銅 朱音	P 憧憬	N 偏愛		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 6 残り財産P: 1

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
コンセントレイト:ブラムストーカー	3	2	メジャー		シンドローム			
効果: C値-Lv(下限7)								
赫き剣	5	3	マイナー					
効果: Lv*2点までHPを消費。消費HP+8の攻撃力を持つ武器を作成								
破壊の血	5	2	マイナー				リミット	
効果: 《赫き剣》の攻撃力+Lv*3、ガード値+5。HP2点消費								
渴きの主	5	4	メジャー		白兵			
効果: 装甲無視。命中時HPをLv*4回復								
朱色の大斧	5	4	メジャー		シンドローム		リミット	
効果: 組み合わせた攻撃でダメージを与えた場合、シーン中の白兵攻撃力を+Lv*4								
始祖の血統	3	4	メジャー		シンドローム		100	
効果: ダイス数+Lv*2。HP3点消費								
ハイブリーディング	1	6	オート				120	
効果: エフェクトの使用回数を回復。シナリオ1回。回復したエフェクト分のHPを失う								
夜魔の領域	1	20	オート				120	
効果: 行動値0で未行動になる。シナリオLv回、ラウンド1回								
原初の赤:一閃	1	3	メジャー		白兵			
効果: 戦闘移動後に白兵攻撃								
原初の白:時間凍結	1	7	イニシアチブ				80	
効果: 即座にメインプロセスを行う。HP20点消費。シナリオ1回。侵蝕率基本値+3								
原初の黒:ライトスピード	1	7	マイナー				100	
効果: メインプロセス中2回メジャーアクションを行う。メインプロセス中C値+1。シナリオ1回。侵蝕率基本値+3								
原初の虚:鼓舞の雷	1	4D10+2	イニシアチブ				120	
効果: 対象は即座にメインプロセスを行う。侵蝕率基本値+3								
妖解放	1	1D10	セットアップ				Dロイス	
効果: ラウンド中、自身のC値-1(下限5)。シナリオ1回								

○概要
陰陽師である父と、鬼と呼ばれた母の間に生まれた少女。自身は検怪達使として京の人々を守る生活を送っている。最近では貴人の護衛を任されることもあり、その経験は良い刺激になっているようだ。

検怪達使としての職務を全うする際には、自らの血液から作り上げた刀剣を武器とし敵対者を蹂躞する。同じ検怪達使ですら恐れを抱くその姿から、「羅刹女」という名で呼ばれることもある。

○衝動への恐怖
梅子の父は、優れた陰陽師であった。京に書をなすものと対峙することもあった彼のもとに、ある時鬼と呼ばれた妖を退けるよう依頼が舞い込んできた。鬼の下へ向かった彼であったが、依頼通りに鬼を調伏する、ということにはなかった。美しい女の姿をした鬼に、心を奪われてしまったからだ。鬼には理性があり、感情があった。梅子の父は鬼を説得し、口説き落とすと、自身のもとにかくまうことを提案した。鬼はこの提案を受け入れ、2人の共同生活が始まった。

2人の間に長女である梅子が生まれるまで、そう長くはかからなかった。梅子が生まれた後も、第2子、第3子に恵まれ、陰陽師と鬼の生活は順風満帆なものであった。鬼の理性が、隠しようのない衝動に食いつぶされるまでは。

或る夜、物音に目を覚ました梅子が目にしたものは家族の亡骸だった。弟と妹は、首を切り落とされ既に物言わぬ肉塊と化していた。その腹からは臓物が引きずり出されていた。四肢を切り落とされた父は、自身が愛した女性に喉をつぶされ、梅子の前で絶命した。陶酔の中にあつた鬼は、満ち足りた表情を浮かべ、最後に残った娘へ目を向けた。

